

考えてみよう「たばこ」の害



「百害あって一利なし」といわれる「たばこ」は、多くの有害物質を含み、健康にさまざまな悪影響を及ぼします。たばこの煙の中には、3、000〜4,000種類の化学物質が含まれており、その

中に約40種類の発がん物質、約200種類の発がん促進物質が存在します。喫煙者は、非喫煙者に比べて肺がんによる死亡率が男性で4.5倍、喉頭がんでは32.5倍高くなります。

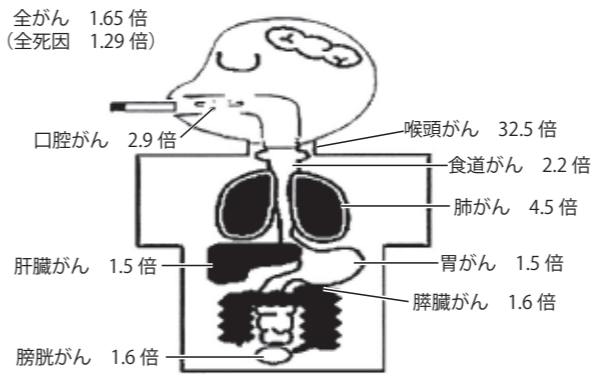
脅かされます。特に、感受性の高い新生児・乳幼児・学童・老人・呼吸器疾患の人に対する影響は気を付けなければなりません。

なります。胎児は直接的に喫煙をしていなくても、有害物質の影響を受け、二重の酸素不足状態を強いられることになり、胎児の健康のためにも、妊婦の禁煙は必須です。

少しでも早い禁煙を

喫煙している人は、禁煙後の年数が経過するにつれて肺がんになる危険度は下がり、禁煙後15年以上経つと、たばこを吸ったことがない非喫煙者と同程度の危険度になるといわれています。一度たばこを吸い始めてしまうと、禁煙するのはとても大変なこともありますが、がんなどの病気から身を守るため、また周囲への思いやりのためにも、少しでも早い禁煙をお勧めします。

非喫煙者と比較した喫煙者のがんによる死亡の危険性 (男)



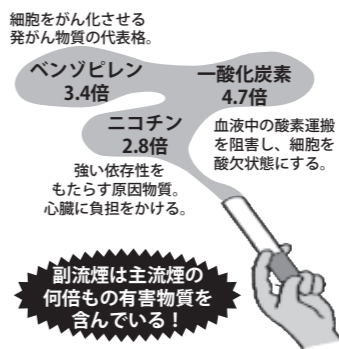
資料：計画調査 (1966~1982)

成長期である未成年から吸い始めると、上記のリスクは大きくなります。新しい細胞ほど発がん物質に影響を受けやすくなるからです。

副流煙は有害物質が2〜3倍室内などで他人のたばこの煙を吸われることを「受動喫煙」といいます。たばこに火を付けたとき、喫煙者が吸い込む煙を「主流煙」、先から立ちこめる煙を「副流煙」と呼びます。副流煙のタール・ニコチン・一酸化炭素などの有害物質の濃度は、主流煙に比べて2〜3倍高いといわれています。目に見えない煙でも害はあり、あつと言う間に、簡単に広がります。

妊婦の禁煙は必須

妊婦がたばこを吸うと、胎盤の血流量が減少し、胎児に対する酸素や栄養の供給が低下するだけでなく、一酸化炭素が胎児の血中に移行することで、胎児は酸素欠乏状態に



巻之百五

鹿児島からやって来た？ 異国風の石灯籠

異国風の石灯籠

巨久町尻海の若宮八幡宮に、ちよつと変わった灯籠があります。

拜殿の前に2基1対で立つ石灯籠です。高さは3・6メートル。アーチのようになった高い台脚の上に、中台、火袋、笠が乗っていますが、これらは宮殿の建築を細かく表現した彫刻となっています。

笠の部分が屋根で、瓦を葺いた様子や軒下の垂木などをリアルに彫り出しています。中台の四隅には勾欄(手すり)の形を再現しており、火をともし火袋の部分がちょうど室内にあたるようです。また、笠の上には雲竜が彫

刻されており、しかも左右で阿吽の表情となっています。

この灯籠は、神社に奉納された石灯籠としては、全国的に見てもほとんど類例のない珍しい形をしており、市の重要文化財に指定されています。デザインは中国風、

もしくは琉球(現在の沖縄県)を思わせるような異国情緒を漂わせています。石材は、調査の結果、鹿児島県産の反田土石であることが分かりました。つまり、鹿児島

写真 若宮八幡宮石灯籠(笠)右 / 若宮八幡宮石灯籠(左)



島県で作られ、尻海に運ばれたものと考えられるのです。誰が奉納したのか

なぜ、誰が鹿児島県産の石を使い、このような一風変わったデザインの石灯籠を奉納したのでしょうか。

台脚の部分に、この石灯籠が奉納された年月日と奉納者の名前が刻まれています。奉納されたのは江戸時代の中期、安永7(1778)年8月16日。奉納者は「薩摩屋藤太夫」という人物です。

藤太夫については詳しいことが分かっていませんが、薩摩屋という屋号から、薩摩国、つまり現在の鹿児島県と関わりのある人物であることが想像できます。

尻海や牛窓の豪商の中には日向(現在の宮崎県)や薩摩の山を請け負い、材木を伐りだす大規模な事業を展開していた豪商もあり、薩摩屋藤太夫もそうした商売に一枚かんでいたのかもしれない。

おそらくは薩摩での商売に成功した薩摩屋が、ふるさと尻海の氏神に感謝の意を込めて奉納したものでしょう。

秋田からも絵馬を奉納

若宮八幡宮には、ほかにも尻海の廻船業が盛んだった江戸時代に奉納されたものが多数残されています。

例えば、県の重要文化財に指定されている「欧風絵馬(干将莫邪図)」は、秋田蘭画と呼ばれる江戸時代の洋風画法で描かれたものですが、寛政4(1792)年にこの絵馬を奉納したのは、秋田藩の御用を務めていたと考えられる谷野屋・平野屋という廻船業者でした。

こうした文化財は、尻海の廻船業者たちが全国を股にかけて活躍し、経済的にも文化的にも豊かであったことを物語っています。

【参考文献】

『巨久町史文化財編』『巨久町史史料編(上)』『巨久町史通史編』